

## 黎明研究のこと

材料開発部 永 井 士 郎

まずは "Serendip(ity)" という言葉に偶然出会った3回の体験の話から。その第1回目は、イギリスのマンチェスター郊外にある小さな町を散歩していた時、偶然に "Serendip" という看板のかかった店を見つけた7年程前の事。窓から見ると民芸品店と喫茶店が一緒になった店であった。看板の意味を理解したのは2回目の体験の時、ある尊敬する先輩からたまたま "Serendipity" の説明を聞かされた。3回目は、ある本屋で偶然にこの言葉がタイトルの訳本 "セレンディピティ" (化学同人) を見つけた半年前のこと。この本、読み始めるとなかなか面白く、買って帰ったその夜のうちに読んでしまった記憶がある。

さて、上述の3回の偶然のうち、3回目の偶然は前の2回の偶然とは質が全く違う。3回目には自分自身の中に前の2回の体験から "Serendipity" を待ち受ける心があったのである。この待ち受ける心が洞察力と相俟って科学における偶然的発見が生まれるというのが上記の本の原著者 R. M. Roberts 教授の論旨である。この本を読んだのは丁度、昨年度からスタートした黎明研究の平成9年度のテーマの応募が出揃った時期であり、テーマ選考を前に大いに考えさせられるものがあった。その一つは、独創性のある研究が黎明研究の狙いとするとところであるが、この独創性とセレンディピティとは研究者の資質においては同じではないかということ。というのは、Roberts 教授の著書を待たずとも、科学における発明・発見には多かれ少なかれ偶然が作用したはず、と考えるからである。そうすると

独創性とセレンディピティとは同義語に近く、違いは、セレンディピティでは発明・発見に対する偶然の寄与がより大きいということだけになる。

もう一つは、これまでは黎明研究の応募対象を国内の研究者に限ってきたが、できるだけ早い時期に外国の研究者にも門戸を解放すべきであること。歴史が教えるように、発明・発見は同じ人に繰り返し起こる。言い換えると、発明・発見はその資質をもつ人に限られる。このことは、独創性のあるテーマを考え得る研究者には限りがあることになる。黎明研究のテーマにはさらに、広義に解釈してではあるが原子力分野という制約が課せられる。そうすると、いいテーマを応募してくる研究者はさらに限られてしまう。この兆候はすでに平成9年度の応募結果に現れている。一人の研究者が2件の応募をしたり、同じ研究者が8年度のテーマとは違うテーマで応募したのはその例である。平成9年度には246件もの応募があり、伊達センター長と嬉しい悲鳴をあげたものであった。来年度以降もこの数字を下回らない応募があると予想できるが、国内だけに限ってはいは、上述のようにいいテーマを応募してくる研究者には限りがある。外国の研究者にも拡げることになると、事務等のロードは格段に増えるであろうが、応募テーマの質は格段に上がるに違いない。外国の研究者を含めることは、そのうちにということで当初から考えられていたことであり、その早期実現に向けて関係者の決断と努力を期待したい。